

173

号月十 高之五 东
 号一十七百第
 年周三立 創會道書葉双
 号念記



25 34

學校日誌より

十月一日 午五時上り 新島徳松三周年記念立書道展覧會舉行す

十月十六日 職員一同扇浦小學校研究授業に出席す

十月十八日 第四艦隊司令官塩澤中将視察の為來島せらる

金品寄贈者芳名

一 金五円也 保護者會へ 柳澤止之進殿

右紙上を以て厚く御礼申上げます

● おまつりについてのちゆうい

「おみこしにちかよつてちやまになつたりけなむらうをけるこ」

「とうろうなどにつらしなこ」

「たべすぢやあまりあるおそくまてあそぼぬこ」

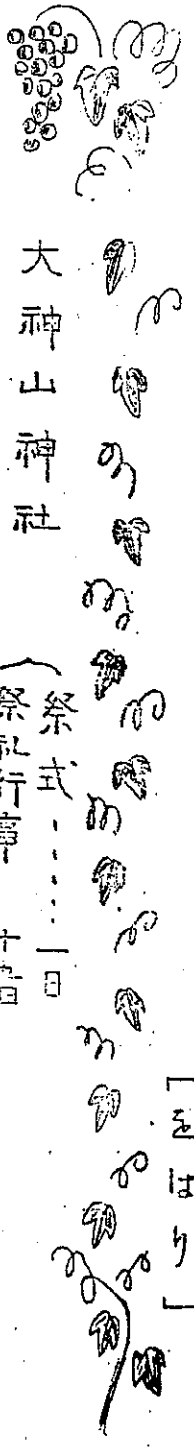


双葉書道會三週年回顧

重田生

昭和六年九月滿洲事変が起ると國民は一齊に長い夢から覺めたやうに自己の眞の姿を認め將來進むべき道を定めようとするに至りました。かくして我が國固有文化の研究は、やがて東洋藝術の粹である書道の鼓吹ともなりまして、小学校に於ける書方教育も再検討をせねばならぬことになりましたが、これは容易な事ではありませぬ。兎に角自らも行り児童にも奨励して實行しつゝ、研究するのが一番捷徑であると思ひまして、恰度其の頃昭和七年要寮司令部に奉職中の石井武山先生に自らも教を請ひ児童の希望者をも導いて頂くことになりました。かくして翌昭和八年先生の御奨めに従つて大阪の石原芳雪先生の主宰されてゐた六華會の機関誌「太陽」に六華會支部員として大人と同時に出書するやうになつたのがそもそ／＼本會の濫觴であります。ところが間もなくこの年九月六華會も石原先生の御病氣のため解散となつて自然太陽も廢刊となりましたので折角こゝまで發展して來た會をむざ／＼解散するのは惜しいといふので石井先生を講師として學校職員及父兄並に有力の方々の御賛同を得て、或は顧問に又幹事になつて御骨折を頂き、に學校の一課外事業として實施するやうになりましたのが昭和八年の十月でありました。以來會員は益増加して翌九年には児童の約三分の一即ち百三十余名を算するの盛況を呈しました。かくして進歩はこれからといふ時生憎講師石井先生には其の十月東京に御轉任になりました。急に暗夜に燈火を失つたやうな有様になりました。其の後の經營を如何にすべきかに悩んだのでありましたが學校の先生方の技も大分進歩して來て居りました上に、元々児童は先生方の指導すべきが本俵であるべきでありますので私始め全職員が共に研究しつゝ指導することに致しまして

こゝに二年會員数は多少減じて百名内外となりましたが、満三ヶ年間出書を一度も休んだことがないといふ熱心家も五名程もあつたやうな次第で、其の技の進歩の著しいことを見て喜ばに堪えない次第であります。書道は實用文字の書方修得ばかりでなく、人格修養の上に多大の効果を認めまして、学校の書方時間外に希望者に課して家庭に於ける習字の指導をするのが本會の目的であります。学校以外の方でも入會して差支へありません。何卒家庭に於かれども入学中は勿論卒業後も引續き勉強するやう御奨励下さるやうこの際特に御願ひしておきます。



大神山神社

祭式...一日
祭礼行事...十五日

大神山神社には畏くも天照大神に譽田別尊、天照屋根命をお祀りしてあります。延宝二五長崎の船頭島谷市左門幸が幕府の命令で此の島を巡檢の時今の宮の法に一社を建立して天照大神八幡大神春日大神を勧請しました。後明治二十九年九月父島の住民が協同して同社を大根山の半腹に築きました。明治二十三年四年の大風で神社が破れたまゝ、修繕が出来ずお祭は一時絶えたが二十七年二月本村の宮内多平さん等が力を併せて再建をはかり同年十一月申請、二十八年五月二十五日再び認可を得て村社として今の處に改めて造営されました。爾來祭礼は感に行はれ今日に至つてお祭りも、しかも今年は大根山遷宮満五十周年にあたります。

おみこしをかつぐ人はいふぶんきをつけておつかへしませう。



書道教育私見

東 達夫

近時簡便なる硬筆の實用性がしきりに喧傳せられ、その徹底的普及は、やがて毛筆全廢の氣運を生ぜしめるか如く見え、併し事實は之に反し、小学校に於ける毛筆書方は依然として重要視されるのみでなく、今日の多端なる社會狀勢に際して、一層の意義あるものとして注目せられつゝ、あるのは一考を要する現象であらう。吾々は勿論實用方面の使命を全うする意味に於て硬筆書方の必要並びにその適應性を否定するものでなく、今後一段の研究と發達とを企圖するものであるが、同時に毛筆に依る書方教育に對しては從來考へられて來た以上の有價値を主張するに躊躇しない。今漢字に就いて之を歴史的に考察すると、その發生當初にあつては原始的象形文字が主となり、龜甲獸骨銅器石鼓等に刻されておたが、其後秦の時代に至り一大飛躍を遂げ、小篆古隸八分、章草の順序を取り、自から畫が省かれ或は併合せられ、漢の時代に入り始めて現在の草書及び楷行の書体が完成して來たことが明らかである。故に一個の文字と云へども必ず其處に起源と歴史とを有し、一定の筆法筆順の法則が嚴存してゐるのである。この法則を無視して、正しく美しい文字を書くことは不可能なものである。のみならず、吾々が文字を覚えるのは主として筋肉を働かせる書寫運動に依ると云はれてゐるか、この法則を最初に教へられるのでなく、なかつたならば正確に、又敏速に文字を覚えることは餘程困難であるに違ひない。而してこの法則を最も効果的に教へ得るものは、二千餘年の昔よりこれに於いて文字を書き、現在の書體を形成して來た毛筆であると云つても過言ではあるまい。元來硬筆は西歐に於て本格的に興る書寫運動の下に發達し來つたものであり、現今では漢字のなを書く場合、毛筆の筆法筆順をそのまゝ踏襲してゐるか、或はかの印刷文字に於ける活字体の如く硬筆本來の性質に盡せる新しき結体筆法筆順を構成するか、或は硬筆そのもの

を改良して我が國字を善くに適するものとする。此の二つの運命におかれてゐるのではないかと思はれる。かゝる實用的見地から云つても毛筆書方は未だ國語學習の心理學的根據を失はず、硬筆書方以上の教育的成具を修め得るものと見て差支へないであらう。併しこれは書方教育使命の第二義であつて、その根本義は次に述べる藝術的方面にあると吾人は確信する。

「用筆ハ心ニ在リ、心正シケレバ則チ筆正シ」これは晚唐の穆宗が書法を問はれた時柳公権の答へた言葉である。又毛筆書方者の個性を現し人格を表現する藝術は他に並りであらう。書道は單に技能と學識に依つてその最高地へ達することは出来ない。古來より書の名人と云はれる者總べてこれ一世に師表たるべき人格者であり、史上に傑出した大人物は又凡人の遠く及ばざる書の妙手であつた事實を徴しても明瞭である。沈着細心、異斷等の諸徳も、白紙に黒い墨が落ちるその刹那の眞剣な精神の緊張の中にも養はれる。かくの如く書の練習は同時に精神の修練を意味し、人格の養成は又書の進歩に必須なる要件となるのである。之を以てしても書方教育が如何に貴重の意志の訓練に人格の陶冶に、深甚な影響を及ぼしつゝあるかを理解出来ると思ふ。書は又個性の表現であると同時に國民性の表現でもある。個性と云ひ國民性と呼んでもこれは全く別個のものではなく、個性は畢竟國民性の中にその根源を有し、國民性を離れて個性に存在しないのである。かゝる故に我が國民性の精華である忠君愛國精神の崇高なる觀念も、精神の明朗澄明にして簡素を好み、姿態の優美艷麗にして端正なる特色も、空海佐理遠風清行成等の大家を通じて我が國書道の上に發揮されて來たのである。和様と云ひ、草假名と云ひ、これ我が國民性の所産であり、且つその顯現であつて、わが大和民族が世界に誇る特異の文化的財宝である。かく考へ來たれば書道は單に個性の表現人格の陶冶にとまらず、更に達人で國民精神の發揚、國民的情操の涵養となり、延いては國體觀念養成の最も貴重な一資材となり得るのである。



リ
ヅ
ヅ
ン
ニ



カタ

はじめての つづりか
たです ほめて やつて
ください

◎ ヒカウキ アサヌマ ミノル
ヒカウキ が タクサン トンダ ノデ
ミカヅキヤマ ニ イツタラ ヒトツモ
ミエマセン デシタ カヘテカラ キンキ
ンノ フネ デ オトウサン ヤ オニイキ
ン ト オホギムラ ノ カイガン ニ ヒ
カウキ ガ イバイ アガタ ノデ ミエ
イダラ バ ヒトツモ キナカタ カラ
ウヘリ ニ マタ キンケン ノ フネ デ
ゲンカン ヲ ミナカラ カヘリ マシタ
◎ ウチノ トウチン ウサハ キヨシ
イツモ フウバウリン ニ イデキテ カラ

トリゴヤ ヲ サウジ シテ トリ ニ
ヲ マデ ミヅ ヲ ヤテ ソレカラ カ
ヲ アラテ カミサマ ヲ オガンデ オ
ヲ ノンデ ゴハン ヲ タベマス ソレカ
ラ イロイロ シゴト ヲ シマス マタ
イクビンキョク ニ テガミ ヲ ダシ ニ
キマス

◎ サカナツリ ワタベ トモヲ
ボク ハ ツリ ニ イキマシタ サラ デ
シマダヒ ヲ 五ヒキ ツリマシタ ボク
シマダヒ ヲ ツル ノガ オモシロクナツ
マタ ツリ ニ イキマシタ コンド ハ
ウシタ ノカ ナトモ ツレナクテ ツマラ
ク ナタケレドモ アキズ ニ ツテ キマ
タラ 一ヒキ ツレマシタ サウシテ ミ
ツテ カヘリ マシタ

犬
ペリ ハ 大キクテモ カハイイ 犬 デス
アサ ハヤク ワタクシ ノ ウチ ニ ミ
ス ワタクシ が ソバ ニ イクト ヲ

マテ ウレシガリ マス オカアサンガ
 ウケル コトヲ オシヘタ ノデ セト
 デキル ヤウニ ナリマシタ オヤツノ
 トキ ハ、ドコ カラカ、キト、ヤテ、キ
 マス。 オクワシ ヲ クレルヨ、オク、
 ビ、ヲ、カラムケテ、マテ、キルト、キ、ガ
 イチバン、カハイイ、デス。
 ◎カキカタ イガラシ マスアキ
 カキカタ ヲ カイタ トキニ、センセイ
 ガ アシタ ハリダス、ト、ムダ、トキ、ボ
 ク、バ、ハマク、アシタ、ニ、ナレバ、ヨイ
 ト、オモヒマシタ。バン、ノ、ゴハン、ヲ
 タベテ、スグ、ネマシタ。アサ、ニ、ナツテ
 かが、ウ、ニ、ムダ、トキ、ボク、ノ、ザ、ハ、リ
 グシテ、ムダ、カラ、ボク、ノ、ハン、リ、ミ
 テ、キマシタ。
 ◎テンノミトリ カシハギシエ
 アイコナン ト、テンノミ、ヲ、ナリ、ニ
 キマシタ。スルト、大、ア、ア、テンノミ
 アリマシタ。ソレ、ヲ、ワ、タ、カ、シ、ガ、ト、

リマシタ。ソシテ、フクロ、ニ、ム、バイ、ニ
 ナリマシタ。ソシテ、ウチ、ヘ、カ、デ、キ、
 タ、ウチ、ヘ、カ、ヘ、デ、キ、テ、ソ、ノ、テン、ノ、ミ
 ヲ、タベマシタ。ソレカラ、ウチ、ニ、カ、
 キ、テ、ア、カ、ナン、ニ、テン、ノ、ミ、ヲ、ヤ、リ、ミ、シ
 タ。ソレカラ、ウチ、ノ、コドモ、ニ、テン、ノ、ミ
 イ、ヤ、リ、マ、シ、タ、ソ、レ、カ、ラ、ウ、チ、ノ、ミ、
 ン、ガ、マ、タ、テ、ム、バイ、ク、ダ、サイ、ト、
 カ、ラ、ヤ、リ、マ、シ、タ、

◎ミナサン ノ、カイタ、ノ、ハ、ミンナ
 タイヘン、ヨク、カケマシタ。
 コンド、モ、マ、タ、ヨク、カキマ、マ、
 ◎ココ、ニ、デ、テ、キ、ナイ、ヒト、デ、モ
 タイヘン、ヨク、デ、キ、タ、ノ、ガ、アリ、
 コ、ノ、ツ、ギ、モ、マ、タ、モ、ト、ウ、マ、ク、
 タ、ダ、サイ、

【尋ニのつり方】

◎五やのはま
 ぼくはこの間、みやのはまへいきました。
 みやのはまへついてすこしたつと、みんなでパンや、キマラメルを
 たべい、あそびました。そのあと、でぼくははじめ君と、ダボをついて
 あそびました。すると、むかひ、からぐんかんの、ボートが、きました。そのボ
 ートを、見て、みると、えらい人が、のつて、おました。
 そのうち、ボートと、ふえが、なりました。すると、へいたいさん、だち
 が、ボートを、こいで、いって、しましました。
 ぼくたちも、かへりました。

浅沼 三郎

◎ばうふう

せんに、大村で、ばうふうが、ふきました。
 学校、から、かへると、おとうさんが、
 げん、は、ばうふうが、ふく、かも、し、れ、な、い、か、ら、う、え、木、を、も、の、お、き、に
 い、れ、る、ん、で、す、よ。
 と、い、ひ、ま、し、た。ぼくは、ご、は、ん、を、た、べ、る、と、す、ぐ、う、え、木、を、は、は、う

横山 弘之

と思つておきました。するとおとうさんが
「かめはこびなさい」といふたから、ぼくは一ばんおほきなうえ木をもちました。すると
おもくて、どうしてももてませんでしたから、ぼくは小さいのをはこび
ました。さうして、ぼうふうのこびに、みんなではこんでしまひま
した。

かめの子

奥山 敏子

うちに、かめの子が、あります。
みずをとりかへしに、おどばたまで、行くとかめが、はた／＼ やつて
おもしろい、です。
この間、かめをつかもうとして、手を出すと、はた／＼して、
とつもつかめません。こんどこそ、と思つて、つかむと、やつとこ
すつとこで、つかめました。
おばやん、たち、が、それを、見て、わらつて、おました。
そり、うち、もとむに、いちやん、が、かめを、はけつに、入れて、うちに
もつて、いきました。

「をはりし」

尋三生の日記

渡辺 三朝

七月九日 水曜 曇り雨

今日はおぢいさんが内地からかへつて来るの
で朝五時に起きた。お船がはいつたので、すぐ
はと揚子でむかへに行つた。少しもつてお
たが雨は降りなかつた。家へかへつて朝御飯
を食へてから学校へ行つた。勉強して居ると
雨が降り出した。多時間目に先生に書方をか
へしてもらつた。學校がひけると急いでかへつ
ておぢいさんに書方を見せると、「上手に書け
た」と言つておみやげをくれたのでうれしく
いたまらなかつた。

十月六日 火曜 晴

今日も僕はねておた。病氣は少しひんなくなつ
て来たから僕は死んでしまふのかと思つた。
けれども、家の人がつしばらくの間だから、ま

んして早くおぼしなさい」と言つたから、
着くもがまんしておと人を着てねた。

十月七日 水曜 晴

考夫君は朝起きてお庭を歩いて居る。僕
だからおけけない。時々學校のおねが聞え
午後考夫君が學校からかへつて来た。僕は
でなければ考夫君と一しよにはたらくのだ
どまだなほ知らないから、はたらくけない。

十月十日 土曜 晴

今日はおよくなるだらうと思つて居るがまだ
ない。今日で六日目になるのに、なほよくない
もうねて居るのがあきて来た。お母さんと
つはほろの」と聞くと、「もうすぐだよ」と
やつた。りんごをむいて、もうついで食へたら
んおしいかつた。午後三時頃おしいや
出になつた。お父さんもうずつと前
をひいておて居る。

八月五日 水曜 晴

小林 幸三

朝おもりをしながら先生の家へ「こみむとへ
いつ行くか」聞きた行った。かへつて来てか
うたさんおもりをしたとお母さんにほめら
れた。これかもしたさんおもりをしよう
と思った。ほいなるふるを食べてから遊んだ。
夕方またおもりをした。

九月十日 水曜 晴後雨

朝おもりをかへつて来て清書を出した行った。
午後雨が降つて来た。小降になつた時に私は
すぐ下水をさうじした。

九月十一日 水曜 晴

今日は書道會があつたので學校に行つた。
多考をとつたのでお父さんやお母さんが大
うお喜びになつた。それから書道會でいた
ういしたやうじやうをかぞへて見たら八枚あ
つた。ねえちゃんのは、私のちやうどはんぶん
だつた。その後でくみちゃんの家へハンカチ
をかへしに行つた。

山丸 芳 夫

八月三十日 月曜 晴
今日でうれい夏休みも終つた。僕は二期に

なつたら一匹けんわい勉強するつもりだ。
おがいたんたちと秋葉さんの所をさうい
つた。かへりにしちやうのくわんしゃた
来た。朝君と植木に水をやつた。
九月十一日 水曜 晴雨
朝おもりかへつた。授業中に雨が降つて来
う書をよめ家へかつた。午後書道會
あつた。夕方朝君と勉強しやうから
水をやつた。

九月十二日 水曜 雨

今日は換日て休みです。もうすぐ九月
つて大神山神社に行かうとして學校の前
いると、おがいたんたちが野さうをやつてお
で、見せおもの中に大神山神社に行くのを忘
まつた。おもの中にたいこが「おんくく」
おんくくおんくく、僕は「あつ」と思つて、
もう今頃行つても間に合はない。仕方な
く、おもの中を向いて頭を下げたまう。今頃
くらぬだと思つて間おがいたんをさうい頭をさ
をばり



算術 渋谷淳
學校の勉強中、
僕は一番算術
がすきで、毎
日算術の時間
をたのしみに
してまつてお

ます。いよく算術の時間になると、僕は心
の中ではとび上るやうなうれしさです。先
生が黒板にもんだいを出しますと、僕は大き
いスラ／＼とやつて行きます。出来る先生
の所へもつて行きます。又先生が皆なのおが
をまわつて見ます。其の時は大てい、まるを必
らへます。少しはまちがつた時もあります。が
その時は、こんごはまるをと思つてやりませう、
だから僕は算術がすきな人でせう、

ヒトフーミツ家の坊やのかえへ年

大風 堀口保信
風が吹いてゐる。強いほげしい風が
帽子をとばされて、追ひかけた

風がよよくて追ひつけぬ
波止場の方も、すごい風 高い波
いくつもつづく、すごい波
風はやんでも、波はたかい
あとからく、よせてはかへす、おハハ

朝の海 鈴木幹哉

この間弟をつれて、朝早く海岸へ行く。海は
大そう、ながで軍艦も飛行機もみえます。ひかう
きは空にもとんでみえます。下りてくるものもあ
ります。下りるのはみんな扇うらへ下ります。
二三だいは空をとんでみえます。村の舟は朝日の
光りをうけながら港まで行く。じつによいな
がめである。すると弟がかへらうといつたから
かへつてきました。朝の早いのは涼しくつてと
てもよい気もちです。……

◎ せみ 世本正子

うらのお山で せみがなく
じい／＼と じいと ないてゐる
かはい そうにせみなくせみは
二三しうかんの じゆみやうです
そんをみじかい いのちでも
みんたで たのしくくらしませう

◎ 朝のお仕事 菊池すえ

朝起れば おには には
木の葉が山のように つもつてる
ほうき持つたが わむいやう
朝日はお山を のぼつてくる
さあ げんも出して はまませう
わたしの ご用には はまませ
ほうきを 持つて げんも出して
サラ／＼きれいに はまませう
さうじが きれいにすんだなら
氣もちもサツパリしてきます

◎ ばらの花 矢堀惠美子

赤いバラ、もも色のバラ
どちらも きれいにさいてゐる
朝起きてみるのがうれしい
うぐひす、目白が鳴いてゐる
赤いバラ ももいろのバラ
どちらも きれいにさいてゐる
だん／＼と たくさんさいてくる
学校へもつて行きますが
お家の花びんにましますか
キレイにキレイにましますわ

日本は世界を 一人りつばな

日本は世界を 一人りつばな
日本人は世界一りつばな人
富士山は世界で一番きれいな山
菊は世界で一番偉い花
そろた／＼と たくさんそろた
君と民とが たくさんそろた
よくそろた
「まはり

五年生の作文

帽子

浅沼 康一

かた／＼と 帽子をやる会社では朝から
一年懸命です、今日は僕の誕生日です
産れるとすぐに同じ会社の仲間と六に帽子屋
へつれて行かれました、或日のこと僕がおと
なしく帽子掛にかけられていと一人の紳士
が来て僕を買って行きました、紳士は
「この帽子は高いかい、帽子屋」といつてかへ
りました、それから後には僕を大切にして会社
に行くときはいつもつれて行かれます、
今でもピカ／＼光つてゐるの、歩いてゐる人
などは時々其の紳士をふり向き、紳士
も得意さうに胸をそらし会社へ急ぎます、
僕は二人ない、紳士にかわれ三喜三福三思
つてゐます

雨のりの後

相沢 春子

雨がやんだ、庭に水たまりがたんさん出来た、
天水もたくさんたまつた、
勉強が終つて出る時間になつた、令れてから五
六年生と顔とりにする、「ほいまーり」
とこゑをかけた、陣ま出る、水たまりがあるの
ですべる、人としやうとつしては又すべる、
まるですべりつくらの競争のやうにすべりなが
りはた取をする、
其のうちに鐘がなる、皆一しよにならぶ
列子付い、と号令がかかる、前へ並へ、なほれ
前へ並ぬ、教室へはいつて勉強した。

白轉車

浅沼 誠

ころびながら習つた白轉車に、今はもうどうや

に乗れるやうになつた、けれど所々やいなし
では乗れない、僕はもつと上手になつて人
を乗せられる様になりた、昨日は藤原の
自轉車をかりて乗つたが、まだ新まいだから
人通りの多い所には出なかつた。

近づく村祭

重田 弥生

にぎやかなお祭、たのしい祭、
其の村祭ももうすぐだ、神社に行けば夜は
あんどんをつるし、御神楽をかついで、
刃シヨイ、とにぎやか、それと
一しよに御獅子が家々にはいつて来て、バク
とおどかして帰つて行く、小さい時はよく
お獅子を見ては泣きながら逃げ出したものだ
つた、其間にはさぬ、お獅子さん、村中
まわつて歩いて行く、たのしい、
村祭、う水しい、村祭、
早く来い、村祭。



好きな花 石津弘子

私は花が大好きです。中でも菊の花が好き
で、あの真白い小菊は大輪よりも美しい、はつ
と一度に咲きそろつた有様は、口につくせない
程見事です。我が國の御紋章の十六枚の
花がりの菊も全く美しい、いつまでも菊の
花を見て居ると、神々しさが身に感ずる。
フリジヤが青い細い葉の間から出て、真白い
花を咲かせて居るのも氣持よい。
ぱらぱら紅や白が香高く咲いて居るのは、なつ
かしい感がする。これも好きな花の一つです。
家のお墓にはりの大輪がある。小菊もあつて
だん／＼はびこつて行く。花の咲き出るのも
近い内です。

すびくしく香のよい文です

時計

小木津 きぬ子

時計のふり子は 林まなこ
私達の教室の 林まなこ
私時計は 真正面
私時計は 有がたい
私時計は くらめつ二
私時計は くらめつ二
私時計は くらめつ二
私時計は くらめつ二

● 良心と悪心 奥山昌英

三日月山の甘蒸烟の近くで坐つて居る一人の
男の子があつた。男の子はも、取りに来たの
だが、其時がほしくてたまらない。ふと悪心が
出て来た。そして男の子に言つた。
「下まで行くのはつかれる。そして若しくれ
なかつたうつまらないだらう。だからだま
つて祈つて逃げなさい。」
男の子は成程と思つた。そしてだまつて取ら
うとする。良心が出て来て
「それは悪い事です。若し見つかつたら叱ら
れます。めんたうくさいやうであるがき、
に行きなさい。神様は常に正しい人を守
ります。」
男の子はこの言葉をきいて成程と思つた。そ
して聞きに行かうとした。すると又悪心が出
て来て
「だまつてとつて行きなさい。
良いや、それはまちがつて居る。聞いてとり
なさい。」

男の子の心は迷った。眼をつむつてたきつて居ると、悪心と良心がけんくわして居る。つひに良心が勝った。男の子はそこで眼をあけて「僕はやつぱり聞いて貰はふ」といつて下へ下りて行つた。悪心はすーと消えて心はやつぱりした。

「おぢさん 甘蔗を下さい」
「あ、い、よ。持つて行きなさい」

男の子は意氣揚々と甘蔗をすいたがりかへつて来た。人にあつてもかくしもしないで。

男の子の名前は奥山昌葉であつた。
面白くありはし方です。又このやうに反省することは良心がみがかれて行きます。

風の子 土屋せい子

「ひゆう〜」と風がうなつて過ぎて行きます。人々は「今夜颱風が来る」といつてばた〜かちん〜と前髪に釘を打つけて居ます。
「あ、又枝を折られるのか」と隣の方まな

さんはためいきをつきました。私も心配でねむれませぬ。明け方近くなる風はいよ〜と張くなつて来ました。私はまだ小さい枝をしつかりと抱いて「やあ、おぢさんからばなれるなよ。はなれたらもう風にとばされてかへつ来られな。いのだよ」といひまかせると、枝の子供達は私にかがりついて「おぢさん〜」とさきりにさわび出しました。おぢさん存命を立て、はいけなよ。しつかりつかまつて居ればよいのだからと私は子供をばげました。風が止むのを今か今かと待つて居ました。あ、人間達は何時か暖かい心の中でおぢさんに眠つて居るだらうに。と色々考へて居る内に、いつか風も雨もすつかりやんぐり人々の音が聞えて来ました。
「お早う 風があまりひどくなくてよかつたね。あの嵐がひどくないのであらうか。私は死ぬ思ひだつたのに。でも子供を一人も取られなくてすんで待つとした。私は思ふぞんぶん枝をからげ青い〜色を葉にふりかけてやつた。
ア〜と深〜味が出てるよ」といつて居ます。

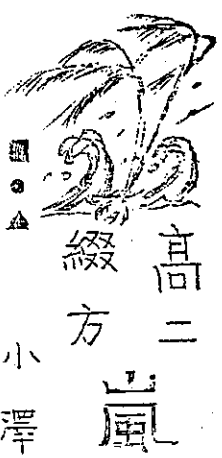
高 奥山 意一

暑〜といつておた夏もいつしか過ぎ去り朝晩涼しさを覺ゆる。秋、東京では早初冬の候であらう。此の小笠原は今が秋がはじつづれたのである。お祭り、運動會も近づいてきた。「秋は天高く馬肥ゆる秋」又「燈火したしむべき秋」と言ふ言葉がある。せみはさかんにジ〜と鳴いておる。とんぼはすい〜と飛んでおる。木の葉は紅くなつて来る。秋氣持ちもよく景色もよい。秋、もろもろ刈り取る時期であらう。色々なる木物も熟する時期である。山にはモモ、ゲワア、などが熟した。みな授業が終ると果物ヒリに出かける。運動に勉強に、讀書に實に良い時期である。夜勉強後など屋外に出て涼風に當る其の氣持、これ等は秋ならでは味ふことは出来ないことである。秋が一番樂い。

龜波止場を見た一番星 菊池 登代
或る夕暮の事、私は何氣なく家を出た。途で淺きやんにあつて二人で龜波止場に行き腰をおろした。
とくもよい眺めだつた。何氣なく龜波止場を見つと一番星がキラ〜と輝いておた。
「アレ、龜波止場の上には一番星が出たよ」といつた。おぢさんは「いつもあるよ、ここには一番星が出るよ」といつた。私は星を見た。東京に行つておるとおぢさんと龜波止場に来て、星の名を教へてくれた時に、おぢさん、その星も輝いておた。でも名前を忘れてしまった。おぢさん、やはり知らなかつた。輝きも又、あの星の美しさが氣にかつた。

お祭り
お祭もだん／＼近づいて来た。藤滝 清
近 行燈の繪をかくの余念がなかつた。
なほ六百枚の繪を五年以上の兒童が
かくのに、どしどし三枚以上ださねば都合が
わるい。けれども出さない人がある。十枚以上出
した人もある。さてお祭は十一月一日であるが
定期船が天候不良のため、予定の日に来
ない。で十五日に延びたさうである。横濱は
おみこしとかつぐのが一番たのしみで、それ
のみ思つてゐる。去年、楽しく面白かつた
ことなど、つぎからつぎに想ひ出されて
毎日指折りおぞえて待つてゐる。

星の明星とか 曉の明星といふ星はど
んな星か
日暮暮れてまもなく西の空を眺めて見
ると、たいへんキラ／＼とかがやいてゐる。
星がある。これが宵の明星である。
又 夜明 前に東の空を眺めて見ると
ほかの星よりも、とく／＼にキラ／＼とかがや
いてゐる星がある。これが曉の明星である。
この二つの星は金星といつて、同じ星で
ある。大きさは、地球とほとんど同
じ位で、地球よりも少し小さいだけである。



高ニ 綴方 嵐
小澤完司

昨日の暴風はすつかりやんだ。十三日の明方
はひどいあれかただった。家がぐ／＼とゆれ
た。傍の木は風にあほられてざわ／＼と鳴つて
おた／＼と揺／＼とバケツやカンカウのから合
ふ音が聞えた。午前三時頃に眠がさめると後ほ
うるさく／＼と揺れなかつた。朝六時頃外に出
て波止場にいつたら、風がひ／＼と吹いて来た。風
がふいてくる度に塩水や砂が体にかつた。シ
ヤツやツボンははぬれてじ／＼と／＼になつた。學校
に来て大村川の海岸の所に行つた。大きな波が
来て、(ガツ)とさける。塩風がひ／＼と／＼と
りたて、盛に吹きつける。授業をへて海岸
に行つたら、風は大分なごつた。十四日にはも
うすつかり風はやんでしまつた。

すさまじい風の音に目をさました。表へ出た。
早いのでいつもなら誰も出ておないが今朝は大
勢出てゐる。掲示板には暴風の中心は西四〇〇料
の所にあると書いてあるが仲々恐ろしい風だと
思ひながら足を波止場に向けた。ひ／＼と吹
く風は我を後へもどさうとする。砂ほこり目ほ
あけられぬ物かけにかくれながら波止場につ
いた。岩壁を越した波はしぶきを我の方へ飛ばして
来る。筑前丸は波にもたあそばされるが如く、あちら
こちらに手にとる如く廻つてゐる。二隻の漁船は
木の葉の様にゆれてゐる。海岸の木は塩風の為に
しぼれてゐる。風防林があるから、我等は少しは風
が防げるが風防林の木は吹きさらして可愛ま
なものである。此の風も今朝はすつかりやんでお
いた。

五十嵐 定彦

安川富貴子

夕方から吹き出した風は夜明方を中心にした強い
風が吹くと云ふ事だ。戸いまりを嚴重にしてその

夜は床についた。ビュウ／＼と吹く風が目かき、音はど海岸に行つて見ると、波は高く岩にあたり、めたお隣の時計が四時を打った。外に出て見るとまた暗く風の音だけが聞える。折から吹つけ、風はどろ／＼と倒れかゝるのをやつとおおへて家の中に入つた。その時、もつと強い風が吹くさうです。と道を行く人が話しながら通つた。それではもつと声いまりを尊重にしなけれ

ぼためだ、と家の人か云つた。その内になんか、明るくなつたので、又外に出て見ると、薄黒い雪は空一面をかけずり廻り、勢のついた風はゴムの木の葉ほど空高く吹上げ、あちらこちらと飛過つてゐる。もう朝飯をたかなくて、何回もつ家に入つた。火は風の吹くたびに消え、何回もつけなほたなければならなかつた。こんな日には、餘程火の元に氣をつけ、火事のはいやうに用心しよう。もしこんな日は火の元をおろそかにしたならば、火は風にあふられ、この大村はたちまち火の海とならう。朝飯の支度も出来たので、表に行つて見ると、椰子の木や、たまごの木が左右に振れるたびに、木の葉がとんで行く。それから

音はど海岸に行つて見ると、波は高く岩にあたり、めたお隣の時計が四時を打った。外に出て見るとまた暗く風の音だけが聞える。折から吹つけ、風はどろ／＼と倒れかゝるのをやつとおおへて家の中に入つた。その時、もつと強い風が吹くさうです。と道を行く人が話しながら通つた。それではもつと声いまりを尊重にしなけれ

ぼためだ、と家の人か云つた。その内になんか、明るくなつたので、又外に出て見ると、薄黒い雪は空一面をかけずり廻り、勢のついた風はゴムの木の葉ほど空高く吹上げ、あちらこちらと飛過つてゐる。もう朝飯をたかなくて、何回もつ家に入つた。火は風の吹くたびに消え、何回もつけなほたなければならなかつた。こんな日には、餘程火の元に氣をつけ、火事のはいやうに用心しよう。もしこんな日は火の元をおろそかにしたならば、火は風にあふられ、この大村はたちまち火の海とならう。朝飯の支度も出来たので、表に行つて見ると、椰子の木や、たまごの木が左右に振れるたびに、木の葉がとんで行く。それから

田中茂子

十二日、十三日にかけての嵐は、物凄なものであつた。私は十二日、学校へ来て、宿直室の前を通ると嵐のことがしるされてあつたので、私は少し心配になつた。学校へははると急いで我家へかへつた。嵐はたん／＼出て来た。私の家では家のものを皆家の中に入れ、雨戸をしめた。夜にはなるにつれて、嵐はひどくなつて行つた。次の朝、学校へ行かうと思つて、仕度をして出掛けようとした。小さい子は、だけは休ませて出た。道は風がひどくて歩けない。境浦の子も途中でおへつて来たので、私達も休むことにした。お晝頃になると隣の家の前のたまごの木が二本折れた。家の前へ出ると、風に吹き飛ばされ、さうになるくらひであつた。



簡易保険二十周年 記念児童書方展覧會受賞者

- | | | |
|---|---|--|
| <p>品二</p> <p>一等 浅沼昭平 二九票</p> <p>二等 高内亨了 二五票</p> <p>三等 浅沼三郎 一九票</p> <p>品三</p> <p>一等 渡辺三朝 三五票</p> <p>二等 永田稔敏雄 三二票</p> <p>三等 石津智子 二二票</p> <p>品四</p> <p>一等 平野昌代 三八票</p> <p>二等 藤滝静子 三〇票</p> <p>三等 高内利子 二七票</p> | <p>品五</p> <p>一等 重田弥生 三九票</p> <p>二等 横山秀雄 三五票</p> <p>三等 田崎文平 二四票</p> <p>品六</p> <p>一等 奥山昌英 三六票</p> <p>二等 和田清 二二票</p> <p>三等 海野糸子 一五票</p> <p>品一</p> <p>一等 高崎輝子 三三票</p> <p>二等 冲山茂子 三〇票</p> <p>三等 菊池かづ 二九票</p> | <p>品二</p> <p>一等 毎田美津 三七票</p> <p>二等 金原くま 二七票</p> <p>三等 原田正道 二五票</p> <p>青女</p> <p>一等 小澤トキ 一七票</p> <p>全 奥山留枝 全</p> <p>二等 奥山忍子 一六票</p> <p>全 大友たつ子 全</p> <p>三等 奥山文子 一五票</p> |
|---|---|--|



打之七三第百二二號
昭和二十二年十月
大村尋常小學校
編輯部發行

